
魔法少女リリカルなのはStrikerS～雷刃ノ騎士～

東雲 緋那

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのはStrikeS（雷刃ノ騎士）

【Nコード】

N7574Q

【作者名】

東雲 緋那

【あらすじ】

なのは達の友人で海鳴市に住む大学生、御堂朔羅^{みどう さくら}は友人のアリサ、すずかと共にごく普通の大学生活を送っていた。

ある日、アリサからなのは達が戻って来ると聞いた朔羅はその日の帰りに変わったアクセサリのようなものを拾って……？

ひよんなことから魔導師となった少女はかつての雷刃をその手に携え魔法少女達と共に空を駆ける！！

魔法少女リリカルなのはStrikerS（雷刃ノ騎士）、始まり
ます。

0話 プロローグ（前書き）

どうも、さすらいの駄文創造機こと東雲緋那です。

今回は前々から書いてみたかったリリカルでマジカルな二次創作を
意を決して投稿してみました。

緋那クオリティの魔法少女達のお話、楽しんでいただけたら幸いです。

0話 プロローグ

ここは第97管理外世界・地球。その地球にある小さな島国——日本の海鳴市にある聖祥大学。

時間的に丁度授業が終わり、休み時間なのか、生徒達は各々キャンパス内で一時の休息をとっていた。

そんな中、キャンパス内に備え付けられているベンチで眠っている少女が一人……………

「く……………す……………」

暖かな色合いの朱色の長髪を左側に寄せるように束ねている少女は、穏やかな陽の光を浴びながら幸せそうに眠っていた。

そこへ、二人組の少女が近付いてくる。

「サクラちゃん、ここにいたんだね」

髪の毛の先端に少しウェーブのかかった少女が眠っている少女――
――サクラと呼んだ少女を見つけて、隣に立っていた金髪の少女を
見ながら言う。

「全く……少し目を離すとすぐコレなんだから……」

金髪の少女は両手を腰に当てて溜息をついてから、サクラの左肩に
右手を乗せて体を左右に揺らした。

「ほら、起きなさいよ？」

サクラ「く……」

だが、サクラは一向に目覚める気配を見せない。

「……………ていつ!?!」

スパンツ!!

サクラ「いたっ!?!?」

痺れを切らした少女がサクラの頭を軽くはたくと、サクラは痛みで声をあげながら目を覚ました。

サクラ「あれ……? アリサにすずか、なんでここにいるの?」

サクラは顔を上げ、キョトンとした表情で呆れ気味な顔をしている少女とその隣で少し困ったような笑みを浮かべている少女———アリサとすずかの方を見た。

アリサ「はぁ……………。どうせまた、“いつもの”だったんでしょ?」

サクラ「んゝ……？ うん、多分。
それよりどうしたの？ 二人とも、なんだか嬉しそうだけど……
何か良いことでもあったの？」

サクラがそう尋ねると、アリサは『よくぞ聞いてくれました！！』
といった感じの様子で笑顔を見せた。

サクラ「ほえゝ……、えっ！？　なのは達、戻ってくるの！！？」

サクラは久しぶりに聞いた友人の名前に驚きながら、アリサに詰め
寄る。

すずか「少し前に、なのはちゃんから連絡が来たから、間違いない
よ？」

その様子を見ていたすずかがサクラを落ち着かせるように言う。

サクラ「なのは達って事は、フェイトやはやて達も一緒だよね！？」

アリサ「ええ。それもなのはから連絡をもらってるから、間違いないでしょうね」

サクラ「そっか……。で、いつ来るの？」

サクラ「明日！？　また随分と急なんだね……。…」

アリサ「ホントよね。もう少し早くに連絡してくれれば、色々と準備とかも出来たっていうのに……。…」

まあ、本人に文句の一つでも言ってやるわよ」

アリサのそんな台詞を聞いたサクラとすすかは二人して困ったような笑いをしていた。



アリサ「それじゃ、明日はさっき言った時間にロッジに集合よ?」

すずか「うん」

サクラ「あれ? ロッジって、この前三人でお泊まり会した時のとこだよ?」

アリサ「そうよ。どうかしたの?」

いや、だってさ………

サクラ「アリサの家って、たっくさん別荘持ってるから、どれかわかんなくなるんだもん………」

アリサ「悪かったわね〜？ 同じ町に別荘持ってちゃって……」

サクラ「いひゃい！！ いひゃいひゃらひっひゃらひゃいひえ〜！
！（訳…痛い！！ 痛いから引っ張らないで〜！！）」

サクラの頬を強く引っ張るアリサ。サクラは目に涙を浮かべて必死に離すように訴えている。

アリサ「あんたが余計な事言うからでしょう？ ……まあいいわ。
それじゃ、また明日ね？」

サクラ「うん。またね〜♪」

サクラは自転車に跨り、二人と別れて帰路についた。

サクラ「さて、一旦アパートに帰ったら翠屋に行っているものように士郎さんに稽古つけてもらって……………」

なのはの事は…………内緒にしとこつと。その方がサプライズ感があるし……………ん？

サクラ「何だろ…………？ この“空気”……………」

私は近くの公園から感じた不思議な空気の正体が気になり、公園の駐輪場に自転車を止めてからその空気を頼りに公園の中を探し回ってみた。

【十分後】

サクラ「確か、この辺だと思…………アレかな？」

見つけたのは、水色の三角形のプレートを二枚重ねたアクセサリ？だった。

サクラ「あれ？　コレ、どこかで見たような……………」

あ、思い出した。

サクラ「フェイトが持ってたのとそっくりだ。
何だろう、コレ……………」

明日、フェイトに聞いてみよつと。

私はそれをポケットにしまって、家に帰っていった。

まさかこれが、私もなのは達と同じ“魔法少女”になるきっかけになるなんて、夢にも思ってた……………

0話 プロローグ（後書き）

次回 『魔法少女達との再会』

1話 魔法少女達との再会（前書き）

台本形式なのはデフォです。

それでは、どうぞ。

1話 魔法少女達との再会

翌日、集合場所のロッジにて……

「ん〜……本当、久しぶりだね……」

「せやな〜………」

「向こうに引っ越してから、何かと忙しかったもんね」

「それに、休暇に全く手を付けてねーもんね」

「」「うっ………」

久方振りの帰郷で、感慨に浸っている三人の少女——なのは、はやて、フェイトは後ろに立っていた赤髪の少女、ヴィータの台詞にグサリときていた。

「なのはさん!!」

ふと、なのはの隊メンバーであり、教え子のスバルが元気に声をかけてきた。

なのは「スバル、どうしたの？」

スバル「あの、現地の協力者の人って、どんな人なんですか？」

なのは「あ、そう言えばまだ言ってなかったよね？ 私達の友だちで——」

なのはがそう言ってる矢先、二台の車がロッジの傍に停まった。

スバル「あれ……？ 地球こつちにも車ってあるんですか？」

「いくら魔法文化が無くたって、車があっても不思議じゃないですよ？」

そもそも、車は科学の産物なんだからね」

スバルの素朴な疑問に答えたのは、彼女とは訓練校の時から付き合いがある少女、ティアナだ。

二人が話している間に、車から二人の人物が降りてきた。

アリサ「なのは……！ フェイト……！」

すずか「みんな、久しぶりだね」

なのは「アリサちゃん!! すずかちゃんも!!」

なのは達三人はアリサ達の近くまで駆け寄って久しぶりの再会の挨拶をしていた。

フェイト「ひさしぶりだね、二人とも」

アリサ「ホントよ!! 全く、来るなら来るでもう少し早く連絡しなさいよね!!」

なのは「にやははは………ゴメンね?」

アリサは昨日言っていた通り、なのは達に文句を言っているが、そ

の顔は再会の喜びで笑顔だった。

はやて「なあ、すずかちゃん？」

すずか「ん？」

はやて「サクラちゃんの姿が見えへんけど、どないしたん？」

すずか「はやてちゃんが来るって聞いて、楽しみにしてたみたいなんだけど……さっき、携帯に電話してみたんだけど繋がらなかったの……」

はやては自分達のもう一人の友人、サクラの事をすずかに聞いてみたが、すずかも困った顔を見せた。



一方、少しばかり時をさかのぼり当のサクラはというと……

サクラ「わあゝ!! 完っ全に寝過ごしたあゝ!!!!」

大慌てでオンボロの、よく言うならば使い古した自転車を全速力で漕いでロッジに向かっていた。

サクラ「ううゝ……… なんてこんな日に限って目覚まし時計壊れて、車も点検出しているのゝ!?!?
……あ、そうだ!!」

サクラは途中で道を外れ、脇の林に突っ込んで行った。

サクラ「確か、この辺りからなら林を突っ切って行った方が……」

ガシャン！！

サクラ「え？」

何があったのか説明しよう。

荒れた坂道になってた林の中を必死にブレーキとハンドルを使って猛進していたサクラだが、不幸な事に悪路と老朽化の影響で自転車の、よりにもよってブレーキ部分がその生涯を終えたのだ。

そして、それまでブレーキで辛うじて制御されていた速度はその抑止が無くなった事によって――――

サクラ「きゃあああ〜っ!？」

サクラのお望み通り、“全速力”でロッジの方向へ坂道を滑降していった。



フェイト「ん……?」

なのは「フェイトちゃん、どうしたの?」

フェイト「今、悲鳴みたいな声が聞こえたような………」

あああゝゝ……………

なのは「ん…………？ 本当だ……………」

はやて「あれ？ この声って……………」

三人が謎の悲鳴を聞き、その正体が気になっている中……………

サクラ「ふええええゝゝ！！！」

悲鳴を上げていた本人が林から飛び出してきた。猛スピードで。

なのは「サクラちゃん!？」

フェイト「サクラ!？」

はやて「サクラちゃん!？」

サクラはとっさに背負っていたカバンをなのはの近くに投げ捨て、
なのは達のそばを通り過ぎ――――

スバル「あ……」

ザッパーン!!

その進路先にあった湖に自転車ごと豪快に飛び込んだ。

なのは達は慌てて湖の近くまで駆け寄った。

フェイト「サクラ………？」

フェイトが湖に華麗な飛び込みをかましたサクラの身を心配している………

サクラ「う………この時期に水浴びは、ちょっと早いかな………」

青ざめた顔で全身びしょ濡れのサクラがゆっくりと這い出てきた。しかも、何故かその頭の上にカニが一匹乗っているのがかなりシュールである。

アリサ「とりあえず、向こうで着替えてきなさいよ。風邪引くわよ？」

サクラ「うん……へっくしっ!!」

サクラはくしゃみをしながら先ほど投げ捨てておいたカバンを拾ってトボトボとロッジの方に歩いていった。

スバル「なのはさん、今の人は？」

なのは「私達の友だちで、名前は——」
サクラ「な～の～は～!!」

はやて「って、早っ!？」

スバルがなのはにサクラの事を聞こうとした直後、有り得ないスピ

ードで着替え、髪を乾かしたサクラが猛ダッシュで戻ってきた。

サクラ「ひさしぶり♪」

なのは「サ、サクラちゃん……くるしいの……」

そして、なのはに思いっきり抱きついた。

抱きつかれているなのはサクラの力が思いの外強かったのか、苦笑いを浮かべながらサクラの腕を引きはがそうとしている。

フェイト「久しぶり。サクラ」

サクラ「わぁ……フェイト、美人になったねえ……」

今度はなのはの近くに歩み寄ってきたフェイトに抱きつくサクラ。

はやて「4年振りに会っても、その抱きつき癖は健在のようやな？」

その様子を見ていたはやてがサクラに近付いた瞬間――

サクラ「よっ！！」

フェイトを抱きしめていたサクラはその手を離し、右手をはやての胸に伸ばす。

はやて「ほっ！！」

しかし、はやてはそれをなれた手つきで左手だけで捌き、逆に空いた右手をサクラの胸に伸ばす。

が、それはサクラの左手で防がれる。その後、約二分ほどこの謎なハイスピードな攻防を繰り返す二人。

はやて「ふっ……………」

サクラ「えへへ……………」

ガシッ！！

そして、互いにとても清々しい笑顔で握手を交わした。

ヴィータ「胸揉み癖も、相変わらずみてーだな」

ヴィータが少しばかり呆れ顔で笑っていると……………

サクラ「ヴィーター♪」

サクラが笑顔でヴィータに飛びついた。当のヴィータはサクラの手を振りほどこうと必死である。

ヴィータ「は、離せ!!」

サクラ「いーじゃん♪ 折角久々に会ったんだからぎゅっして
もっ♪」

だがサクラはそんなヴィータを意に介さずに抱きかかえてご満悦、
といった表情をしている。そこへ………

「あらあら、賑やかだから来てみれば………」

「久しぶりだな。御堂」

サクラ「シャマル姉さん!! シグナム姉さんも!!」

サクラは自分が姉のように慕っていた女性達の下に駆け寄った。

………ヴィータを抱きかかえたまま。

シャマル「少し見ない間に、大きくなったわね♪」

サクラ「うん♪ ……わわっ!？」

シャマルと話をしていたサクラの手を、ヴィータはようやく抜け出した。

そんなヴィータをシャルとシグナムの二人は“ドンマイ”的な目で
見ている。

サクラ「あゝ……もつとぎゅゝってしてたかったのに……。
あ、そうだ。シグナム姉さん、久々に組手やろうよ？ 姉さん達が
引っ越してから、ずーっと鍛えてたんだから!!」

シグナム「成程……その身に纏っていた空気はその鍛錬の賜物、と
言うことか……いいだろう。その誘い、受けて立とう」

シグナムはサクラの誘いに口元に笑みを浮かべて答えた。

1話 魔法少女達との再会（後書き）

◆あとかぎ◆

緋那「どうも、作者の緋那と……」

朔羅「主人公の朔羅だよ♪」

緋那「さて、今作、『雷刃ノ騎士』のあとかぎでは主に私と朔羅で話しながら進めようと思ったんだけど……」

朔羅「うーん……何を話そっか？」

緋那「とりあえず、今回はコレ読んで？ 次回のタイトルと、締めの一言が書いといたから「一枚のメモを渡す」」

朔羅「なになに……？」

次回、『紹介、銭湯、組手、おまけに復活！？』

緋那「ハイ、締めの一言！」

朔羅「この力で、私は飛ぶ！！！」

??「ねえ、僕の出番まだ？」

オリキャラ設定（前書き）

主人公、朔羅の設定です。

オリキャラ設定

名前…御堂みどう 朔羅さくら

呼び名…朔羅、サクラ、御堂

年齢…19歳

身長…S t Sのはやてと同じくらい

体重…秘匿事項（本人談）

3サイズ…85／69／74

髪型…腰まで届く位の朱色の長髪を左側に寄せるように束ねている。
この束ねる位置は気分を変えている（主にはうなじの辺りか、サイドポニー）。

瞳…アクアブルー

好きなもの…甘いもの、辛いもの、友だちと一緒にいる時間、演劇

嫌い（苦手）なもの…友だちを傷つける人、トマト、一人でいること

◆備考◆

なのは達の友人でアリサ、すずかと同じ大学に通う大学生。

はやての親友でもあり、なのはやフェイトとはすずかとははやてから紹介されて知り合う。

彼女もまた、かつての『闇の書事件』ですずか達と同じく結界に取り残される形で“魔法”というものと出会う。

その後、はやてから自分たちが魔導師である事を明かされてからもそれまでとなにも変わらずにはやての親友として接していた。

実はナルコレプシー（コレについては下に記しておきます）という脳疾患の一種を患っていて、放っておくと昼間でも眠っている事もしばしばある。

はやての親友なだけあり、八神家の面々とも仲が良くシグナムとシヤマルの二人を姉のように慕い、ヴィータとリインを妹のように可愛がっていた。

ザフィーラは話し相手兼、眠っている時の見張り役だった。

性格はフェイトのようにどこことなくポケポケとしていて穏やかな物腰だが、人の感情の機微に敏感で親しい人間の世話を焼きたがる。

本人曰わく『“空気”でわかる』らしい。

その性格と物腰からか、不思議と他人を惹きつける魅力を持っている。

ついではやてに負けず劣らずの揉み魔で抱きつき魔でもある。でも悪気や他意はなく、純粹なスキンシップのようなものらしい。

また、かなり負けず嫌いな節があり、過去に何度もシグナムに組手

（得物はシグナムは木刀、サクラは棒を使っていた）を挑んでは負けを繰り返している。

はやて達がミッドに引越してからも鍛錬は欠かさず、定期的なのはの父・士郎にも稽古をつけてもらっている。

自分が成すと決めた事なら無茶な事でも平気でするので、アリサやすずかからしたら心配でたまらないようだ。

事実、過去にその無茶が祟って大怪我をしたことがある。

実は父親が日本人、母親がイギリス人のハーフで本名は『サクラ・フレイシハイム F・ミドウ』。本人的には長くて呼びにくいからという理由で普段は父親の『御堂』姓に名前の『サクラ』を『朔羅』と字をあてて『御堂 朔羅』と名乗っている。

大学に通うようになってからは大学近辺のアパートを借りて親の仕送りとアルバイトで稼いだお金とで生計を立て、一人暮らしをしているのだが、一人でいるのが苦手なためよくアリサやすずかの家に転がり込んだり逆に招いたりしている。

夜寝る時は抱き枕等、何かを抱きしめてないと寝れないタイプ。

趣味、特技が多く裁縫や料理、演劇やマッサージと幅も広い。特に裁縫は小さなぬいぐるみから材料さえあるならコスプレ用の衣装なんかも作れる。

演劇は高校生の時から演劇部に入部したのがきっかけで興味を持つ。演目によっては男役も何度か演じているので男装やコスプレには特に抵抗はなく、お洒落の延長的な感じに思っている。

普段は滅多に怒らないが、一度完全にキレてしまうと別人と見間違えてしまいそうな位に目つきが鋭くなり、口調も変わる。

◆ナルコレプシーについて◆

脳疾患の一種で、本人の意志に関わらずに日中にも激しい眠気に襲われたり、感情の昂ぶり伴って全身の力が抜けてしまったり、呂律が回らなくなったり、無意識に眠ったりするなどの症状がある。

この事はなのは達にはちゃんと話している。

また、薬による治療法もあり、サクラもそれを行ったのだが一向に治る気配がなく、医者も頭を抱えていたがサクラ自身は『これも自分の個性だ』と割り切って生活している。

士郎との稽古や日々の鍛錬の成果なのか、感情の昂ぶりによる脱力の発作——情動脱力カタブレキシはある程度自分で制御出来るようになったが、やはり睡眠障害の方はどうにもできないようだ。

オリキャラ設定（後書き）

余談ですがイメージCVは坂本真綾さん（KHシリーズ、CCFFのエアリス的な感じ）です。

2話 紹介、銭湯、粗手、おまけに復活!?(前書き)

ここから先は地の文やなのは達といったサクラと親しい間柄の人の台詞では「サクラ」、

スバル達の台詞では「朔羅」と書き分けております

では、どうぞ。

2話 紹介、銭湯、組手、おまけに復活!?

サクラとシグナムが組手の約束を交わした後、なのは達は全員、サクラ達現地メンバーの前に整列した。

なのは「紹介するね？ 私たちの教え子で——」

スバル「初めまして!! スバル・ナカジマです!!」

ティアナ「こら! 声が大きい! ……あ、すいません。あたしはティアナ・ランスターです」

「僕は、エリオ・モンディアルと言います」

「わたしはキャロ・ル・ルシエです。この子はフリードって言います」

「キュク」

なのは達の教え子、機動六課のフォワード陣がそれぞれ……いや、主にスバルとティアナの二人が少々個性的な自己紹介をした。

アリサ「あたしはアリサ、アリサ・バニングスよ？」

すずか「私は月村すずか。みんな、よろしくね？」

サクラ「私は御堂朔羅。ホントの名前はもうちょっと長いんだけど……まあ、いっか。とにかく、よろしく♪」

アリサ達もそれに続いて自己紹介を済ませると、それまでキャロの隣をパタパタと飛んでいたフリードはサクラの頭の上に乗った。

サクラ「およ？」

キャロ「フ、フリード………降りなきゃダメだよ………？」

サクラ「私なら平気だよ？ 元々、動物に好かれやすいみたいだからね♪」

フリード「キュク〜♪」

少し困った表情を浮かべるキャロだが、サクラはのほほんとした表情で頭上のフリードの頭を撫でていた。

サクラ「そうだ、そっちの仕事で街中とかで動いてる間、フリードは私が見てよっか？」

この辺りは人通りが少ないから良いけど、流石に街中じゃあ目立ちそうだし、カバンとかに入れば大丈夫かもしれないけどそれじゃあフリードがかわいそうだもんね。

キャロ「フリード、朔羅さんの言うこと、ちゃんと聞ける？」

フリード「キュクル〜♪」

キャロがフリードにそう聞くと、フリードはサクラに顔をすり寄せてきた。

その後、なのは達が仕事で動いてる間にサクラ達で晩ご飯の買い出し（フリードはお留守番）に出掛けることにした。



アリサ「さて、何にしましょうか……………」

すずか「人数も多いから、鉄板を出してバーベキューとかはどうかな？」

サクラ「あ、私はやてからメモもらってるよ？」

サクラはポケットからメモを取り出して、アリサに手渡した。

アリサ「えっと……？ 『食べ盛りが二人ほどいるから量はあるだけ多く！！』 具体的には豚肉とか牛肉とか鶏肉とか……とにかく肉類！！』」

すずか「なんだか……すごく偏ってるね。
となると、やっぱりバーベキューが良いのかな？」

サクラ「よし、それじゃあ手分けして食材調達だ〜！」

サクラの合図でアリサとすずかの二人でメインの肉類を、朔羅は一

人で野菜類の買い出しに動き出した。



買い出しの後、ロッジに戻ってバーベキューの準備を済ませてなのは達が戻ってくる頃には日も暮れてきていた。

そして、そこから先は————戦場と化した。

ヴィータ「あっ!?! スバル、てめえ!?!」

シグナム「むっ!?! エリオ、お前………」

スバル「ごめんなさい!!」

スバル「今回は譲れないんです!!」

はやて「ふふふ……飛び交う箸、宙を舞う肉……これこそが食卓^{じよう}や!!」

食べ盛りなエリオとスバル、負けず嫌いな傾向があるヴィータとシグナムにノリではやても加わって鉄板の上はまさしく戦場だった。

五人とも、揃って普通では有り得ない速さで肉に箸を伸ばし、他の箸を弾いている。

アリサ「量は多くって、こういう事だったのね……」

そんな鉄板の上に、アリサはポカーンとした表情で肉を追加してい

く。

サクラ「うわゝ……あっちの鉄板、色々凄いことになってる………」

ティアナ「すいません……。何だか騒がしくしちゃって……」

一方、こちらは二枚の鉄板を合わせて大きな鉄板にしてサクラ、なのは、フェイト、すずか、ティアナ、リインにキャロ、シャルルの八人で鉄板を囲んでいた。

サクラ「平気へーき♪ ご飯は賑やかな方がいいと思うよ？」

膝の上にリインを座らせ、焼けた肉を皿の上に乗せてキャロに手渡すサクラ。

その合間に自分も食べつつ、フリードにも肉を食べさせるのを忘れない。



リン「んゝ♪ お腹いっぱいです」

（一部）激しく、（大半は）穏やか夕食を済ませた一同は皆のんびりと食後の時間を過ごしていた。

ティアナ「ん……少し、汗の匂が目立ちますね……」

サクラ「ずっと火の傍にいたようなもの……あゝ!!」

服の襟元を掴んでその匂いをかいで、首を傾げるティアナの隣でサクラがいきなり大きな声を出した。

フェイト「ど、どうしたの？」

サクラ「わ、忘れてた……。ここ、お風呂とか無いんだ……
…」

サクラは顔をしかめて右手を額に当てて軽くため息をついた。

なのは「あ、だったら“あそこ”はどうかかな？」

サクラ「え……？ ああ！！ “あそこ”だね？」

ティアナ「?？」

なのはの言葉に思い当たる節があったのか、サクラは明るい表情^{かお}を見せ、逆にティアナは話が見えず、少々困った表情^{かお}をしていた。



「いらっしゃいませ！ スパークーア2へようこそ♪」

サクラ達がやってきたのはロッジから少々離れた所にあるスーパー
銭湯。

ちなみにアリサ、すずかの二人は念のためにフリードと一緒にロ
ジで待機している、。

「何名様ですか？」

なのは「えーっと………大人が八人に、子供が四人です」

サクラ「あれ？ 子供って、エリオとキャロと………」

リン「私とヴィータちゃんですっ」

ヴィータ「あたしは大人だ!!」

リンの発言に不満気に文句を言うヴィータと、それを見て頭を撫でながらなだめるサクラ。

サクラ「まあまあ……… 後でアイス買ってあげるから、機嫌直して? ね?」

ヴィータ「ホントか!?!」

そんな二人のやりとりを見て――――

なのは（やっぱり子供なの）

フェイト（やっぱり子供……かな？）

はやて（やっぱり子供やな）

スバル（いいな、アイス……）

少々失礼な事を思っていた三人娘と一人、違うことを考えていたスバルがいたのは内緒だ。

そして、浴場に入るまでもう一つ、問題が発生した。

サクラ「フェイト、ちょっとストップ」

フェイト「えっ？」

サクラ「どうしてエリオも女湯に連れてこうしてるの？」

そう、フェイトがエリオの手を引いて半ば強引に女湯に連れて行くようにしているのだ。

当のエリオは顔を真っ赤にして必死にフェイトの手を外そうと奮闘している。

フェイト「だって、そこにも書いてあるよ？」

フェイトが指を指した先には『11歳未満の方に限り、男湯・女湯のどちらでも入浴可』と書かれた貼り紙があった。

サクラ「え〜……でも、エリオくらいの年だと恥ずかしいと思うけどなあ……」

フェイト「そう……かなあ？」

その後、サクラはやっぱりフェイトを説得。どうにかエリオを男湯に向かわせることに成功した。◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

サクラ「ん〜……みんなで入るお風呂ってのもいいよね〜♪」

湯船に浸かり、大きく体を伸ばして気持ちよさそうに声をあげるサクラ。

ふと、隣でのんびりと湯船に浸かっていたキャロに声をかける。

サクラ「キャロ？」

キャロ「何ですか？」

サクラ「ほんとはエリオと一緒にいたいんでしょ？」

キャロは顔を少し赤くして小さく頷いた。

サクラ「さっきフェイトが指差してた貼り紙には何て書いてあったかな？」

サクラがそう言うのと、キャロは湯船から立ち上がってトテトテと男湯の方に向かい、サクラは『がんばってね♪』と言って手を振った。

はやて「いやゝ、サクラちゃんも人が悪いなゝ♪」

サクラ「んゝ？ 何の事かなあゝ？」

はやて「エリオとキャロを二人つきりにしたかったから、わざとエリオを男湯に行かせたんやろ？」

はやてがそう言うのと、サクラはイタズラっぽい笑みを浮かべた。

サクラ「だってゝ………… 二人とも、お互いに気になってるって“空気”が出てたからねゝ。ちょっとお節介しちゃった♪
あ、スバルゝ、背中洗ってあげるよゝ？」

サクラは体を洗っていたスバルの方に近づいた。

スバル「え、いいんですか？」

サクラ「いいですよ♪ ……むむ？ スバル、結構胸大きいね
ゝ……………」

スバル「はえっ！？／／／」

サクラは左手でスバルの背中を洗いつつ、右手でスバルの胸を揉む。
そのあと、スバルに背中を洗ってもらうためにスバルに背中を向けた。

スバル「（朔羅さんも大きいと思うんだけどな……………）あれ？
朔羅さん、この背中の傷って一体何ですか？」

スバルはサクラの右わき腹から背中にかけてある大きな傷痕を指で
なぞりながら聞いた。

サクラ「ああ…… それはね、昔、ちよーつと無茶したときに……
ね」

サクラがそう言うのと、スバルは首をかしげていた。



サクラ「あれ？ キャロ、それにエリオも」

一足先に風呂から上がったサクラは、待合室のような場所にある長椅子に仰向けになって倒れているエリオと、その隣で彼の面倒をみているキャロを見つけた。

キャラ「あ、朔羅さん……………」

キャラは朔羅に男湯の方であった出来事を話した。

なんでも、エリオはキャラが男湯に来た直後はなんとか女湯に行くように促していたのだが結局押し負けて一緒に入っていたのだが、エリオがのぼせてしまつてキャラが近くにいた人に頼んでエリオを風呂から運び出してもらつたらしい。

サクラ「なるほどね…… 少し待ってて？」

サクラはキャラ達のそばから一度離れて、どこからコーヒー牛乳が入ったビンを二つ持ってきた。

サクラ「はい♪ 一本はキャラの分、もう一本はエリオの額に当ててあげて？」

少しは楽になると思うからさ」

ビンを二本ともキャラに手渡し、自分はエリオの隣に座って手でエリオの顔を扇いであげていた。

しばらくすると、なのは達も風呂から上がって来た。

リイン 「!! サーチャーに反応あります!!」

直後、リインの一言でなのは達——それまで仰向けになっていたエリオも飛び起きて慌ただしく動きだした。

フェイト 「ごめん、サクラ。先にロッジに戻ってて？」

サクラ 「うん。車、動かしたところか？」

フェイト 「うん、お願い」

はやて 「ゴメンな？」

フェイトとはやてはサクラにレンタカーのキーを渡してから、なのは達に少し遅れて銭湯を出て行った。

サクラ「さて…… 二台じゃ流石に私一人で動かしていくわけには
いけないからね……」

サクラはポケットから携帯電話を取り出して、ロッジに待機してい
るアリサに電話をかけた。

サクラ「もしもし、アリサ？」

アリサ「へなに？ どうかしたの？」

サクラ「なのは達、仕事の方に行っちゃってるから、フェイトとは
やてのレンタカーをそっちに動かしたいんだけど……」

アリサ「わかったわ。すずかを乗せてすぐにそっちに向かうから、
ちょっと外で待ってなさい？」

サクラ「そうだ、ロッジ戻ったらで良いから、アリサの車、ちょっとだけ貸して？」

アリサへどうして？>

サクラ「なのは達にアイスでも買っておこうと思ってね>

アリサへロッジに戻ってから、ね。とにかく、外で待機していること。OK?>

サクラ「りょくかい♪」

サクラは電話を切り、アリサの言うとおりに銭湯の外でアリサ達が来るのを待っていた。

そして、アリサ達と合流したサクラはすずかにフェイトのレンタカーを任せて自分はやてのレンタカーに乗ってロッジに戻り、それからアリサに車を借りて付近のコンビニにアイスを買に向かった。



サクラがアイスの買い出しから戻ってきて、フリードと一緒に遊んでいるとなのは達も帰ってきて――――

シグナム「約束通り、相手になろう」

開口一番、シグナムがそう言ったのを合図に全員、ロッジの外に出た。

シグナム「さて、見せてもらおうぞ？ お前の鍛錬の成果を」

サクラ「えへへ…… 望む所だよ？」

デバイスではなく、木刀を構えるシグナムに対して、身の丈より少し長い棒を構えてサクラが答える。

はやて「二人ともく？　頑張ったなく？」

アリサ「サクラく？　頼むからあまり無理はしないでよねく？」

二人以外の面々は少し離れた所から二人の様子を見ていた。

シグナム「では、始めるぞ？

………烈火の将、シグナム——」

サクラ「御堂朔羅——」

シグナム「推して参る！！」

サクラ「推して参る!!」

二人はほぼ同時に動き始め、互いに距離を詰める。

サクラ「はっ!!」

先手を撃ったのはサクラだった。

サクラは踏み込みの加速に棒特有のしなりを活かした加速を乗せて鋭い一撃を打ち込む。

しかし、シグナムはそれを余裕の体で防いだ。

シグナム（この初撃の鋭さ……… 恐らく、気の遠くなる程の反復練習で身に付けたものだろう………）

その一撃を防ぎながら、シグナムは冷静にサクラの一撃を分析していた。そして同時に、自分の内にある戦闘^{バトルマニア}狂の血が騒ぎだしているのを感じていた。

シグナム「はあっ!!」

今度はシグナムが返す刀で一撃を見舞おうとする。

サクラ「よっと!!」

だが、サクラがそれを棒で防ぎ、互いに鏝^{くわ}迫りあうような状態になった。

シグナム「ふっ…………… 予想以上に腕を上げたな。御堂」

サクラ「流石シグナム姉さん…………… 一発が重いね……………」

迫り合いながら悠長に会話をする二人。だがその間も力は抜かず、互いに相手を押し飛ばそうと機を伺っている。

サクラ「ほっ!!」

シグナム「ふっ!!」

伺い合うだけでは埒があかないと判断したのか、二人とも後ろに跳び退いて距離をとった。

そして再び同時に動きだし、互いの間合いに入るのを合図に今度は目まぐるしい攻防の応酬が始まった。

互いに攻め、防ぎ、かわし、いなし、その動作は流れるようで――

——さながら、二人だけの舞踏会のようにもあつた。



はやて「わゝ…… サクラちゃん、すごいなゝ……」

リイン「ですゝ……」

ティアナ「いくら魔法とデバイスを使っていないとはいっても、あのシグナム副隊長と同じレベルの動きをするなんて……」

スバル「地球の人って、みんな朔羅さんみたいな動きが出来るんですか？」

アリサ「うゝん…… サクラが特殊なだけだと思うわ」

一方、はやて達観戦組はサクラが買ってきたアイスを食べながら二人の動きを見ていた。

ヴィータ「にしてもサクラ、随分とうまく“受けてる”な〜……」

ヴィータはアイスを片手に、サクラの動きの中で気になった所を指摘した。

なのは「ヴィータちゃん、それってどういう事？」

ヴィータ「あたし程じゃねーが、シグナムの剣の“重さ”はそこらの近接タイプの魔導師に比べて段違いに重い。それを全部バカ正直に真っ向から受けてりゃ武器の方が持たねえ」

なのは「サクラちゃんがシグナムさんの剣を受け続けていられるのは、その剣の“重さ”を散らして受ける方法を持ってるから……って事？」

ヴィータ「まあ、口で言うほど簡単な事じゃねーけどな」

フェイト「サクラ、発作は大丈夫なのかな………？」

エリオ「発作………？」

フェイトはサクラが抱えるある種の“爆弾”のことを心配していた。



シグナム「ここまで強くなるとはな!!」

サクラ「当然!!」

爽やかな笑みを浮かべながらも一歩たりとも退かない二人。

シグナム「はっ!!」

シグナムが放った一撃をサクラは避けようとした。しかし……………

フラッ……

サクラ（あ…… やば——）

サクラは突然その場に膝から崩れるように倒れそうになる。当然、そんな状態でシグナムの剣をかわせる筈もなく——シグナムの剣は、サクラの頭に直撃した。

サクラ「がつ……!?!」

シグナム「御堂!?!」

サクラはそのまま前のめりに倒れた……………



サクラ「ん…… あれ……………?」

フェイト「あ、気がついた?」

サクラが目を覚ますと、そこはロッジの部屋の一室で、自分はベッドの上に寝かされていて、そのそばにあるイスにフェイトとエリオ

の二人が座っていた。

サクラ「あゝ…… そっか。私、あの時………」

フェイト「もしかして、あの発作？」

サクラ「うん。久し振りに熱くなっちゃった………」

エリオ「あの、発作って一体何なんですか？」

フェイトとサクラの会話を聞いていたエリオが一つ、質問をした。

サクラ「そうだなあ…… エリオって『ナルコレプシー』って知ってる？」

エリオは首を横に振った。サクラは半身だけ起こして話を続けた。

サクラ「脳の疾患の一種なんだけどね、昼間でもいきなり眠くなっちゃったり、さっきみたいに感情が昂ぶると体の力が抜けちゃったりする発作が出るんだ」

エリオ「そんな発作を抱えていたのに、あれだけの動きを……………？」

サクラ「まあ、かなり無茶な鍛え方してたからね…………… そのおかげか、感情の昂ぶりによる脱力発作——情動脱力カタブレキシの方はある程度コントロールできるようになったんだけど……………」

「完全じゃあないんだよね」と、サクラは言った。

サクラ「さて、子どもはそろそろ寝る時間だよ？ エリオ」

フェイト「そうだね。エリオ、行こう？」

サクラ「あ、フェイト？」

サクラはエリオの手を引いて部屋を出て行こうとするフェイトを呼び止めた。

サクラ「エリオを部屋に連れて行ってからで良いから、あとでもう一度ここに来て欲しいんだけど。
ちよっと、聞きたい事があったさ」

フェイトはコクンとうなずいてから部屋を出て行った。

【十分後】

フェイト「それで、聞きたい事って？」

フェイトがサクラにそう聞くと、サクラは自分のカバンの中をがさがそと漁り始めた。

サクラ「実は、フェイトに見てもらいたい物が……あつた♪」

サクラはカバンから昨日拾ったアクセサリのような物を取り出し、フェイトに渡した。

フェイト「これって……」

サクラ「昨日拾ったんだけど……確か、フェイトも似たようなの持ってたでしょ？」

何か知ってるんじゃないかな〜って」

サクラがそう言った直後————

キィィン……………

サクラ「えっ？」

フェイト「えっ？」

フェイトの手にあったそれが突然光り出した。

『ふわ〜…… よく寝たなあ〜……………』

そして、それから声が発せられる。その声はフェイトにそっくりであった。

フェイト「も、もしかして……………」

フェイトはその声に心当たりがあった。

自分と同じ声、自分と同じ形状の待機状態のデバイス。

かつての『闇の書事件』、その余波被害とされた事件——『闇の
欠片事件』で構築体^{マテリアル}と呼ばれていた少女達の一人——

フェイト「『雷刃の襲撃者』……………」

『え？ フェイト……………？』

フェイト「ええっ！！？」

雷刃の『ええ〜っ!?!?』

二人の声がロッジに響き渡った。

2話 紹介、銭湯、粗手、おまけに復活!?(後書き)

◆あとかき◆

緋那「予想外に長くなった第2話。どうも皆様、緋那です」

朔羅「モロに受けなくて良かったけど、シグナム姉さんの木刀、すっごく痛かったよ……」

あ、こんにちは♪ 朔羅だよ」

緋那「さて、今回で雷刃の襲撃者が出てきた訳ですが……」

朔羅「あの子って、はやて達が子どもの頃にやつつけられちゃったんでしょ？」

どうして今になって？」

緋那「それはまた次回って事で。

次回 『理由と名前、そして旅立ち』」

朔羅「この力で、私は飛ぶ!!」

3話 理由と名前、そして旅立ち（前書き）

会話文が長くなった第3話です。

尚、作中での雷刃の襲撃者の台詞では某大佐がちっさい錬金術師を呼ぶような感じで『雷刃の』と表記しています。

では、どうぞ。

3話 理由と名前、そして旅立ち

雷刃の襲撃者とフェイトの叫び声がロッジに響き渡った後、なのにはやて、シグナムとヴィータとシャマルの五人がサクラの部屋に集まった。

その時、シグナムの顔色が物凄く悪かった事をここに密かに記しておこう。

フェイト「……つまり、あの時完全に消滅したはずだった構築体^{マテリアル}の破片が残っていて、それが長い年月をかけて再生して、今になって目覚めたってこと？」

雷刃の『うん』

フェイトは雷刃の襲撃者からどうして彼女が復活したのかを聞き、それをまとめてから彼女にたずねた。

ちなみに今、雷刃の襲撃者はサクラと一緒にベッドに置かれている。

ヴィータ「それにしたって、どーしてデバイスになってんだ？」

ヴィータはもつともな質問をした。

そもそも構築体^{マテリアル}は『闇の書事件』でなのは達によって倒された『闇の書の闇』の残滓が再び復活するために生み出したヒトのような存在で、雷刃の襲撃者はフェイトがベースとなっていて、先端が青い水色の髪に紫色の瞳をした少女だ。
復活するのなら、その姿で現れるハズである。

だが、今の彼女は彼女が使っていたデバイス——『バルニフィカス』の姿をしているのだ。

普通に考えるならおかしいとヴィータは思ったのだろう。

雷刃の『僕にだってわかんないよ!! 目が覚めたらこーなってるし、みんな成長してるし………』

雷刃の襲撃者は少し困惑しているような様子で声をあげた。

なのは「それじゃあ、もしかすると他の構築体^{マテリアル}の子達もみんなデバイスになって復活してるってこと？」

なのはの言う“他の構築体^{マテリアル}の子”と言うのはなのはがベースとなっている『理』のマテリアル、『星光の殲滅者』とはやてがベースとなっているマテリアルの『王』、『闇統べる王』の事だ。

ちなみに雷刃の襲撃者は『力』を司るマテリアルだ。

雷刃の『んゝ……』それも、僕にはわからない。ただ、あの二人の力は感じないから、まだ目覚めてないのか、完全に消えちゃったのか、はたまた地球^{こし}じゃないどこかで目覚めてるのか………』

雷刃の襲撃者がそう言った直後、シグナムとヴィータの疑いの視線が彼女に向かった。

サクラ「まゝまゝ二人とも、そんな目しないでよ？　この子、嘘を

ついてはいないよ？」

それを“空気”で感じたサクラは雷刃の襲撃者をフォローするように明るい口調で二人にそう言った。

ヴィータ「……………まあ、サクラがそう言うんなら、嘘じゃねーだろうな」

シグナム「そうだな……………それより、お前はこれからどうするつもりだ？」

雷刃の『うーん……………正直言っちゃうと、もう『闇の書の闇』のこことかもどーでもいいし……………そうだ！ 君、名前は？』

サクラ「ほえ？ 私？」

雷刃の襲撃者は「うん」と答える。

サクラ「私は朔羅、御堂朔羅だよ？」

雷刃の『朔羅かあ…… よし、僕はこれから朔羅のデバイスとして一緒に戦うよ!!』

サクラ「えっ!？」

はやて「ち、ちよい待ち!？ サクラちゃんは魔導師やないんよ？」

はやては雷刃の襲撃者の言葉に慌てて反論する。だが、雷刃の襲撃者はここにいる全員にとって――――

雷刃の『え？ だって朔羅――――

リンカーコアの反応、あるよ?』

衝撃的な一言を言い放った。

「「ええゝっ!!?」」

サクラ「りんかーこあ?」

その場にいたサクラと雷刃の襲撃者以外の全員が叫び声をあげて、
当のサクラは意味が分からず、キョトンとしていた。

六人で一斉に叫んだらスバル達が起きるんじゃないか? とかは考
えてはいけない。

シグナム「シャマル」

シャマル「え、ええ」

シグナムは雷刃の襲撃者が言った事の真相を確かめれるべく、シャ

マルに診るように頼み、シャマルは自分のデバイス、クラールヴィントを起動。明るい緑色の光がサクラを包み込んだ。

シャマル「……本当みた……ええ！？ 変換資質が二つに、それとは別に希少^{レアスキル}技能持ち！？」

シャマルはクラールヴィントから出される解析結果を見て、驚いたような声をあげた。

サクラ「うう…… はやて、わかんない事ばっかで頭がごちゃごちゃしてきたよ……」

サクラは困ったような表情ではやての方を見た。

はやて「せやな。サクラちゃんにわかるように、私たちが説明してるわ」

はやてはそう言ってどこからか黒板を引っ張り出してきて、そこに色々と文字を書き出した。

はやて「まず、リンカーコアって言うんは、私やなのはちゃんみたいな“魔導師”の力の源みたいなものや」

サクラ「うんうん」

はやて「それでな、私たちが使う魔法は主に“ミッドチルダ式”と“ベルカ式”の二つに分けられるんよ」

サクラ「ミッドチルダ式？　ベルカ式？？」

サクラは黒板を見ながら首を傾げた。

はやて「ミッドチルダ式………　通称“ミッド式”は攻撃や防御、支援にと汎用性に優れているんや」

なのは「ベルカ式は更に“古代ベルカ式”と“近代ベルカ式”の二つに分けられていて、どちらも主に個人での戦闘能力に優れている」

サクラ「しつもん。ベルカ式の方は古代と近代とに分かれてるけど、何が違うんですか？」

サクラは手を挙げて、さながら学校で授業中に先生に質問するような感じでなのはに質問をした。

なのは「本来、“ベルカ式”って呼ばれるのは古代ベルカ式の方で、大昔にあった国で生まれた術式体系なの。
近代ベルカ式は、シュミレート技術で再現されたベルカ式で、その仕組み上ミッド式みたいな後方戦闘の技能もある程度は修得できるの」

サクラ「つまり、古代ベルカ式は完全な前衛型で近代ベルカ式は古代ベルカ式とミッド式を足したような感じ……って事？」

はやて「まあ、そんなとこやね。

せやけど、人によってかなり差が出るんよ？ シヤマルは古代ベルカ式やけど直接的な戦闘やなくて治療やサポートのエキスパートやからね」

なのは「ちなみに、私たちの中でミッド式なのは私とフェイトちゃんにティアナとキャロ、

近代ベルカ式はスバルとエリオ、古代ベルカ式はヴィータちゃんにリインちゃんとシグナムさん、シヤマルさんとザフィーラだよ？」

はやて「私は少し特殊で、ミッド式とベルカ式の混合術式や」

サクラ「ふうん…… あ、そうだ。さっきシヤマル姉さんが言っていた“変換資質”と“希少技能”って何？」

はやてはそれまで書いてあった文字を消して、その上からまた新たに文字を書き始めた。

はやて「希少技能はその名の通り、レアな能力の事や。ただ、能力やその大小はまちまちで、そもそも所有者も少ないから詳しい事

は分かったらへんのよ。

それと、変換資質も元々は希少技能レアスキルに含まれるんよ」

サクラ「ふむふむ……」

はやて「変換資質は魔力を火や雷みたいな属性的な変化をさせる時に使える技能や。

普通、魔力をそういった変換をさせようとするとき色々なプロセスが要るんやけど、変換資質を持ってるとその属性に変換させるときの過程を飛ばして変換する事が出来るんや」

サクラ「なるほど……ん？　そう言えなさっき、どうしてシャマル姉さんはビックリしてたの」

サクラははやての説明を聞きながら、その中にあった疑問点を、シャマルに聞いてみた。

シャマル「希少技能レアスキルは所有者が少ないって、はやてちゃんが話して

いたでしょ？ それだけでも珍しいのにそれに加えて変換資質を“二つ”も持っているなんて、すごく数が少ないケースなのよ？」

サクラ「え、そうなの？」

今度ははやてに話を振った。

はやて「変換資質は少し珍しい位なんやけど、持ってるのは大抵一種類だけなんよ。

複数種持つてるのは私も話だけでしか聞いたことないからな」

サクラ「ほえ…… はやて達の中だと、誰が変換資質を持つてるの？」

フェイト「私とエリオが『雷撃』、シグナムが『炎熱』、変換資質じゃないけど『凍結』系統の魔法を使えるのがリインだよ」

シヤマル「サクラちゃんが持つてるのは『炎熱』と『雷撃』の二つよ？」

フェイトの言葉にシャルがつなぎ、サクラはカバンからペンとメモ帳を取り出して色々とメモをとっていた。

サクラ「おお〜♪ フェイトやシグナム姉さんとお揃いなんだ〜」

雷刃の『雷撃持ちなら、僕のパートナーにはうってつけだね♪』

サクラと雷刃の襲撃者はそれぞれ嬉しそうにそう言った。

はやて「後は………… サクラちゃんがどうしたいか、やな」

はやては真剣な表情でサクラの方を見た。

サクラ「私が？」

はやて「せや。私たちと一緒に魔導師として戦う道を選ぶか、ここに残って魔法の事を隠して過ごすか……」

はやての言葉に、全員が真剣な表情になる。

サクラ「私は…… はやて達と一緒にいきたい」

サクラは一呼吸置いてから、はやてに自分の意志を伝える。

シグナム「良いのか？ 間違っても、楽な道ではないのだぞ？」

サクラ「それでも、だよ。

それに、はやてが魔導師だって聞いた時からずっとな私望んでた事なんだもん。

『はやて達の力になりたい』って。そのために鍛え続けてきたんだからね」

サクラの瞳は曇りのない澄んだ色で、そこには一切の迷いが無く、揺るがない決意が静かに光を放っていた。

はやて「そうか…… なら改めて、よろしくな♪」

サクラ「うんっ♪」

二人はニコツと笑って握手を交わした。

サクラ「さて…… アリサやお父さん達にはどうやって説明——」

「その必要はないわよ？」

サクラが今後の事を考えていると、部屋の扉が開き——

すずか「一通りの話は、こっそり聞いてたからね」

アリサとすずかの二人が部屋にやって来た。

サクラ「ア、アリサ？ えっと……」

サクラは気まずそうな表情でどうにか言葉を取り繕おうとオロオロしている。

が、それは取り越し苦労に終わった。

アリサ「大丈夫よ。別に止めたり、どうして一人で決めたのって責めにきたわけじゃないんだからね」

サクラ「え……？」

アリサ「あんたが一度やるって決めたことは、まず曲げない性格だって事はよく知ってるのよ？
……行ってきたさい。あんたの両親や大学の方には、私達でどうにか説明しといてあげるわ」

すずか「ただ、定期的に連絡はしてね？」

サクラ「……うん。ありがとう、二人とも」

サクラは短く、その一言の中に心の底からの感謝と謝罪を込めて言った。

アリサ「親友、でしょ？ 私達は。
とにかく、それを言いに来ただけだから。お休み、サクラ？」

すずか「おやすみ、みんな」

二人はそれだけ言って、部屋を出て行った。

雷刃の『良い人達だね…… あの二人』

サクラ「うん…… あゝ!!」

サクラは突然、何かを思い出したかのように声をあげた。

はやて「ど、どないしたん？」

サクラ「この子の名前、決めてなかった……」

「」「あ……」「」

サクラの一言に、はやて達は口を揃えて声を漏らした。

雷刃の『え？ 僕には『雷刃の襲撃者』って名前があるけど？』

サクラ「えっとね、それは一般的には“呼び名”、もしくは“通り名”って言って本当の名前じゃないんだよ？」

雷刃の『え!?!? そうなの!?!?』

私が簡単に説明してあげると、驚いたように声を上げる雷刃の襲撃者。

と言うか、今までそれを本名だと思ってたのに驚いたよ……

フェイト「そうだね。デバイスならちゃんと名前をつけてあげないとね」

サクラ「そうそう。それで、どんな名前が良いかな?」

雷刃の『カッコいいの!?!』

即答する雷刃の襲撃者。

あなた、一応女の子なんだから……でも、カッコいいのかあ……

……

サクラ「あ、そうだ!!」

フェイト「いい名前、浮かんだ？」

サクラ「うん!!」

サクラは黒板に自分のアイデアを書き始めた。

サクラ「“雷刃の襲撃者”の“雷”^{かみなり}の字を“神鳴”^{かみなり}に当てて……
『神鳴』^{カナン}って言うのはどうかな？」

雷刃の『お…… すつつごくカッコいい!!』

雷刃の襲撃者はとても気に入ったのか、すごく嬉しそうに声を上げた。

サクラ「よし、決まり♪　これからよろしくね？　神鳴」

神鳴（雷刃の）『うん!!』

雷刃の襲撃者————名を改め、神鳴は元気に返事をした。

はやて「ほな、試しに神鳴ちゃんをセットアップして……」

シヤマル「はやてちゃん、多分“今のまま”じゃ無理よ?」

はやて「え?」

サクラ「えっ?」

神鳴『なんで？』

シャルの言葉に、三人は揃って疑問の声を上げる。

シャル「だって、神鳴ちゃんはフェイトちゃんのバルディッシュがベースになってる………つまり、ミッド式のインテリジェントデバイス。

だけど、サクラちゃんは私達と同じ古代ベルカ式の魔導師なのよ」

はやて「要は、サクラちゃんの術式に神鳴ちゃんを合わせてからじゃないと使えへんって事？」

シャル「ええ」

サクラ「ありやうや………」

神鳴『む………』

神鳴が不服そうに声を漏らすと、シャルが「大丈夫」と言葉をつないだ。

シャル「六課の方に戻れば、その調整もすぐできるから、心配しないです。」

はやて「せやな。後は向こう…… ミッドに戻ってからやね」

フェイト「それじゃあ、今日はもう寝ようか？」

フェイトの言葉を合図に皆、次々とサクラの部屋から出て行った。

サクラ「それじゃ、おやすみ。神鳴？」

神鳴『うん』

みんなが出て行ったのを見てから、二人も眠りに就いた……。。



【翌日】

スバル「えっ！？ 朔羅さんも魔導師だったんですか？」

サクラ「うん。シャマル姉さんが言うには、私もスバル達みたいにリンカーコアがあるんだって」

キャロ「デバイスは、どんなのを使うんですか？」

翌朝、サクラはスバル達に自分もミッドへ向かう旨を話していた。

ちなみに、神鳴の事はスバル達にはまだ隠したままである。

これははやての判断で、神鳴の出所が少々特殊な事を考えれば妥当な判断である。

サクラ「まだ決まってるじゃないあ……できれば、一番しっくりくる長物がいいな」

神鳴《僕ならフェイトのと形状同じだから長物だよ？》

サクラのカバンの中に入っている神鳴から、サクラに念話が送られる。

実は、はやてがサクラに神鳴の事を隠しておくように言ったとき、ついでに念話の仕方だけ教えていたのだ。

サクラ《大丈夫。ちゃんと分かってるから、ね？》

サクラは神鳴に念話を返す。

ティアナ「魔導師になるって事は、管理局の方に入るんですか？」

サクラ「ううん。はやてが言うには、民間協力者ってかたちなんだって」

サクラ達が喋りながら移動の準備をしていると、なのは達にアリサとすずかを加えた五人がやってきた。

すずか「サクラちゃん、なのはちゃん達をお願いね？」

サクラ「任せて♪ 三人とも、すぐ一人で抱え込んじゃうクセがあ

るもんね」

なのは「にゃはは…… 返す言葉ありません……」

アリサ「サクラも似たようなものでしょ？ 放つとくと昼間でも眠りだすわ、何食わぬ顔で無茶なことをしだすわ……」

サクラ「あははは……」

アリサの鋭い切り返しに、サクラもなのはと一緒に乾いた笑いを始めた。

フェイト「さて…… そろそろ私達は行くね？ 二人とも」

アリサ「しつこく言うけど、なるだけ無茶な事はしないように！！」

いいわね？」

サクラ「だ〜いじょ〜ぶだよ♪　じゃ、行ってきますー!!」

サクラはアリサとすずかに笑顔で手を振って一時の別れを告げ、なのは達と共にミッドチルダへと向かう――

3話 理由と名前、そして旅立ち（後書き）

◆あとかき◆

緋那「ども。緋那でっす」

朔羅「朔羅だよ♪ で、今回は——」

神鳴『僕もいるよ』

朔羅「私のデバイス、神鳴も入れて三人だよ♪」

緋那「さて、ようやく魔法少女らしくなってきましたか？」

朔羅「次回はどんなお話？」

神鳴『ちゃんと僕の出番もあるよね?』

緋那「もちろん! それじゃあ今回の締め言葉は二人に頼んで――次回、『セットアップ!』」

朔羅「この力で、私は飛ぶ!」

神鳴「この力で、僕は飛ぶ!」

緋那「お楽しみに!」

4話 セットアップ!! (前書き)

本日のキーワード (?)

『バリアジャケットは自分の年齢、体型にあったデザインにしましょう』

では、始まります。

4話 セットアップ!!

「デバイスの術式体系の変更、ですか？」

ミッドに到着してすぐに、なのは達は自分たちが所属している部署、機動六課に向かいサクラはフェイトと共にそこでデバイスマイスターとして勤めている女性、シャーリーの下を訪れた。

フェイト「この子…… サクラのデバイス、ミッド式のデバイスなんだけど、サクラ自身は古代ベルカ式の魔導師なの。出来る？」

シャーリー「大丈夫ですよ？ デバイス自体が出来上がっているなら、後は根本的な所に少し手を加えれば済みますから♪
ついでに、何らかの機能も追加出来ますよ？」

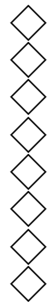
シャーリーは調整に必要な機材やデータの用意をしながらサクラに問いかけた。

フェイト「それじゃあシャーリー、サクラをお願いね？」

シャーリー「わかりました〜♪」

サクラ「終わったら、念話送るね〜？」

フェイトはサクラをシャーリーに任せ、一度デバイスルームを出て行った。



【三十分後】

シャーリー「よし、これでバッチリですよ？」

サクラ「神鳴、調子はどう？」

サクラは調整を済ませ、先程までとは違って赤紫色になった神鳴を手に取り、神鳴にどのような調子かを聞いた。

神鳴『うん、バッチリ♪ 朔羅が戦うって言うなら、いつでもいけるよ?』

調子は快調なのか、神鳴は元気に返事をした。

その後、フェイトに調整が終わったことを念話で伝えて暫くするとすぐにフェイトがデバイスルームにやって来て、サクラはフェイトに案内されてなのは達がいるという訓練室に向かった。



サクラ「うわゝ……………」

神鳴『すゝ……………』

サクラと神鳴は訓練室の中に広がるバーチャルの市街地の完成度の高さに感嘆の声を漏らしていた。

はやて「ほな、調整もちゃんと済ませた事やし、早速神鳴ちゃんをセットアップしてくれるか？」

サクラ「あ、ちょっと待って……」

はやてはサクラにセットアップするように促したが、サクラは神鳴を持っていた右手を前にかざした。

サクラ「マスター認証」、だっけ？　それ、まだ済ませて無いの」

直後、サクラの足下に赤紫色のベルカ式の魔法陣が展開される。

サクラ「……マスター認証、御堂朔羅。術式は古代ベルカ式、デバイス名称『神鳴』」

サクラが神鳴に正式に自らをマスターの名前として登録を宣言すると、神鳴は少しの間、点滅を繰り返した。

神鳴『オッケー、認証完了！　朔羅？』

サクラ「うん！　神鳴、セットアップ！！」

認証を済ませ、神鳴を頭上に掲げるとサクラの体は魔法陣と同じ赤紫色の光に包まれた。

光が収まると、そこには騎士甲冑を身に纏ったサクラが立っていた訳だが……………ここで一つ話がある。

神鳴は元々、神鳴が――『雷刃の襲撃者』が使っていたデバイス、バルニフィカスに彼女の人格がAIのように組み込まれているデバイスだ。

そして、バルニフィカスに登録されているバリアジャケットはベースとなっているフェイトの別カラータイプだ。

サクラとシャーリーが先程までしていたのは神鳴の“術式体系の変更”と、“新機能の追加”でバリアジャケット（騎士甲冑）は変更していない。

……………回りくどい言い回しが苦手な方のために、ストレートに言うてしまうと

雷刃の襲撃者が着用していた——もとい、フェイトが子ども頃に着用していた色々と過激すぎるバリアジャケットが騎士甲冑として展開された。

サクラ「きゃああゝゝっ!!!?」

まあ、そんなものがいきなり展開されれば驚くのは当然である。サクラは顔を真っ赤にして大きな悲鳴を上げた。

サクラ「か、神鳴!! 一度戻して!!
こんなのじゃ恥ずかしくて戦えないよっ!!」

神鳴『そう? カッコいいと思うんだけどな』

サクラ「私がつとカッコいいの考えるから!!」(泣)

サクラは涙目になって神鳴に頼み込み、騎士甲冑を解除した。

一方、この光景を見ていたフォワード陣と隊長陣はというと……

ティアナ（あ、あれが噂に聞いたフェイト隊長の子どもの頃のバリ
アジャケット………）

エリオ（刺激が強すぎて僕には直視できません………！！）

スバル（可愛いと思うけどなあ………）

キャロ（可愛いと思いますけど………）

リイン（可愛いと思うです………）

ヴィータ（大人の体型で着ると、色々とすげー事になるんだな。アレ）

シグナム（確かに、あれでは少々目のやり場に困るな）

はやて（ふむ……。今度サクラちゃんにあの衣装、（フェイトちゃんに着せるために）作ってもらおうかな……。？）

なのは《レイジングハート、今の映像、記録出来た？》

レイジングハート《はい、問題ありませんが……。》

フェイト（あんなの着て戦ってたなんて……。うう、昔の私のバカあ……。／／／）

バルディッシュ《Sir、あまり気を落とさずに》

と、いった具合に各々思考を巡らせていた。

なのはさんの行動が気になるかも知れないが、気にはいけない。

気にはいけないと言ったらいけない。



【十分後】

サクラ「よし、書き換え完了っ」と

サクラは何事もなかったように再び神鳴をセットアップ。新たに設定した騎士甲冑を展開する。

その姿は、どこかの兵士のような装束の上から、赤いマントを羽織った姿だった。

サクラ「ん、イメージ通り……………だね」

神鳴『おお、僕のよりカッコいいや♪』

サクラは騎士甲冑の隅々にまで目を通し、自分のイメージに沿った外見となっている事に満足し、神鳴もサクラがデザインした騎士甲冑が気に入ったようだ。

なのは「それじゃあ、動きの確認も兼ねてコレを相手にしてみて？」

いつの間にか別室に移動していたなのはが、アナウンス越しにサクラに指示すると、訓練フィールドの各所に訓練用のガジェットが配置された。

なのは「今配置したのは、攻撃性はないけど敵を感知すると一目散に逃げていくように設定してあるから、逃がさないように上手く倒してね？」

サクラ「はい」

サクラはその場から少し歩いた場所で、一度立ち止まった。



サクラ「さて…… 神鳴、ターゲットは全部で何機？」

神鳴『合計八機。一機、この近くにいるよ?。』

サクラ「飛行とか、出来る？」

神鳴『うん、大丈夫。慣れないうちは僕がサポートするから任せて？』

サクラ「頼りにしてるよ？」

サクラは神鳴に少しでも笑いかけながら、意識を飛ぶことに集中させた。

すると、サクラの体がふわりと中に浮かび上がった。

サクラ「よし……行くよ!!」

神鳴『うん!!』

サクラは真上に飛び上がり、上空からガジェットの一機を捕捉した。

サクラ「はっ！！」

ガジェットの真上に移動してから一気に急降下、反応させる間もなく破壊する。

神鳴『サクラ！　ここから見える範囲にもう一機！！』

神鳴の指示ですぐさま周囲を確認、少し離れた所にいたもう一機のガジェットを捉える。

サクラ「確か、こうやって……」

サクラは前方に六基の魔力スフィアを形成――

サクラ「電迅衝!!」

変換資質を用いて電気を付与してガジェット目掛けて一気に撃ち出した。だが、それではガジェットは破壊できなかった。

サクラ「あれ？ おかしいな…… それに今の、何だか当たる直前に魔力がバラバラになったような感じが……」

神鳴『朔羅、シャーリーが入れておいてくれたデータだと、アレはAMFってシステムらしいよ?』

サクラ「AMF?」

神鳴『うん。魔力の結合なんかをある程度無効化しちゃうみたい』

サクラ「つまり、それを突破してダメージを与えるにはもっとパワーのあるのか、さっきみたいに魔力を使わない物理的な攻撃じゃないかやダメって事？」

神鳴『だね』

二人が話している間に、先程の攻撃でこちらに気付いたガジェットは逃走を始めていた。

だが、サクラは慌てずに先程と同じようにスフィアを形成する。

サクラ「電迅衝——」

サクラはそのスフィアを一つにまとめて、それを圧縮してまとめる前のサイズにした。

サクラ 「貫^{つらぬ}つー!!」

そして、それをさつきよりも速い弾速で撃ち出した。

撃ち出された弾は、ガジェットを見事貫通。更にその延長線上にいたもう一機のガジェットも撃ち貫いた。

サクラ 「これであと五機、だね」

神鳴 『あ、この先で三機、集まってるみたいだ。一気に倒しちゃおうよ?』

サクラ 「了解!!」

サクラは建物の間を縫うように飛行して、ガジェットが密集している区画を目指す。

サクラ「見つけた！」

遠目でガジェットを目視したサクラは一度上空に移動、ガジェットを見下ろすような位置で立ち止まった。

サクラ「カートリッジロード。神鳴、ハーケンフォーム」

カートリッジを二発込めてから、神鳴の先端の斧部から魔力の刃が鎌のように伸びた形態になった神鳴を構える。

サクラ「光翼斬、三連！！」

体を器用に捻るように回転させ、流れるような動きで神鳴を振るい、三発の魔力刃を発射する。

それらはガジェット達を逃すことなく破壊。これで残りは二機だけとなった。

サクラ「そこっ！！ 神鳴、セイバーフォーム！！」

空中から残り二機の内の一機を捉え、サクラが指示を出すと、神鳴はザンバーフォームに近い形状——片手持ちの細剣のような形状になった。

サクラ「やあぁっ！！」

一気に距離を詰め、ガジェットに魔力刃を突き立て、そこから横に切り払う。

その時、丁度その近くにいた最後の二機がサクラに気づき、逃走を

図った。

サクラ「逃がさないよ？ 神鳴！」

神鳴『うん！！ ソニックムーヴ！！』

逃げようとするガジェットの背後からソニックムーヴで接近。その勢いを乗せた一閃でガジェットを真っ二つに斬った。

サクラ「うーん…… やっぱりまだ、剣は慣れないかな……？」

セイバーフォームを解除した神鳴を片手でバトンのようにくるくると回しながらサクラはポツリと呟いた。



フェイト「お疲れ様、サクラ。体は大丈夫？」

サクラ「平気ヘーき♪」

別室から様子を見ていたなのは達はサクラの下にやって来た。その時、フェイトは真っ先にサクラの発作の事を気にかけていたが、サクラはにこやかに振る舞い、特に問題はないことをアピールした。

はやて「最後に使ってたの……アレは神鳴ちゃんの追加機能な
んか？」

神鳴『そーだよ？ 他にも色々あるんだけど……まだ秘密だよ♪』

はやてが神鳴にセイバーフォームの事を訪ねると、神鳴は自慢げに答えた。

なのは「さて、動きの確認も済んだし、総合的な能力の測定のために一回誰かと模擬戦をして……」

シグナム「高町、その役目、私が引き受けよう」

いつの間にか騎士甲冑を展開して、いい笑顔をしているシグナムがサクラの相手に名乗り出た。

はやて「サクラちゃん、それでええか？」

サクラ「もちろん！！ 相手がシグナム姉さんなら、断る理由なんてないよ♪」

サクラもシグナムに負けず劣らずのいい笑顔で返した。

4話 セットアップ!! (後書き)

◆あとかき◆

緋那「はい、どーm……………」

朔羅「光翼斬!!」

緋那「ぎゃー!?!」

朔羅「どうしてあんなの着させたの!?!」

緋那「いや、朔羅のデバイスを神鳴にしようと思った時点から使おうと思ったネタで……………」

あの、朔羅さん? その後ろで展開している大量のスフィアは……………」

朔羅「ん? ただのお仕置きだよ?」

神鳴『頑張って避けてね〜?』

緋那「ちよっ!? 待———」

※ちよっとお待ちを※

朔羅「さて、タイトルコールは神鳴、よろしく♪」

神鳴『うん。次回、『全力測定!! サクラVSシグナム』!!』

朔羅「この力で、私は飛ぶ!!」

5話 全力測定!! ～サクラvsシグナム～

なのは「二人とも、準備はいい?」

再びモニター室に移動したなのはがアナウンスで二人に様子を聞く。

ちなみにフェイト達は二人から少し離れた場所から様子を見ている。

サクラ「こっちはオッケーだよ?」

シグナム「此方もだ」

なのは「それじゃ、改めてルールの説明をするね?」

制限時間は無制限の一本勝負。どちらかの騎士甲冑が半分以上損傷、もしくはサクラちゃんの発作みたいに戦闘続行が困難と判断した時点で終了だよ?」

なのは「説明はこれでおしまい……………はじめ!!」

なのはの合図と共に二人は一気に間合いを詰め、ほぼ同時にその初撃を打ち出す。

シグナム「つつ……………!!」

瞬間、鏖競り合うようになったシグナムはサクラの力に押され、半歩ほどその身を後ろに退いた。

シグナム「ぐっ…!!?」

シグナムがサクラを押し返そうとすると、サクラはその力を器用に受け流し――

サクラ「はっ!!」

無防備だったシグナムの腹部に蹴りを入れて、二人の間に距離が開いた。

サクラは空に上がり、神鳴を右手に持ち、空いた左手をシグナムの方に突き出す。

サクラ「紫電槍!!」

左手に魔力を集中させ、変換資質を用いて電撃を付与したレーザーを発射する。

レーザーは着弾すると、大きな土煙を上げてサクラの視界からシグナムを消した。

神鳴『やったかな?』

サクラ「まさか、シグナム姉さんだよ?　こんなのでやられるはずが……ないっ!!」

土煙を逆手に取っていたシグナムの奇襲をサクラは危なげなくシルドを展開して防ぐ。

サクラ「ふ……、危ない危ない」

シグナム「それだけ余裕のある動きで防いでおいて、よく言うな?」

シグナムは後ろに下がり、二人は縦横無尽に空を書けながら攻め合
いを始めた。



スバル「朔羅さんの動き、すごい……」

ティアナ「確かに、今日初めて魔導師となった人の動きじゃないわ
ね……」

フェイト「サクラは元々、戦いにおける基盤となる動きができて
るし、学習能力の高さもあるからね。基本さえ教えちゃえば、そこ
から一足飛びで行っちゃうような子なの」

はやて「それに、相手がシグナムやから、てのもあるんやろな」

一方、観戦していたスバル達は、サクラの動きの良さに驚きを隠せ
ないでいるようだ。

キャロ「どういふことですか？」

はやて「サクラちゃん、ああ見えてすごい負けず嫌いでな。私らが小さい頃も、何度も何度もシグナムに挑んでは負けてを繰り返してたんや」

エリオ「つまり、負けたくない相手だから、自分の実力以上の実力が引き出せている……って事ですか？」

エリオの問いかけに、はやては黙って首を縦に振った。

ヴィータ「サクラ、空戦そらでの動きが随分良いな」

ティアナ「空戦そらでの動き……ですか？」

ヴィータ「ああ。陸戦と空戦じゃ色々の違いがあるが、何より一番違うのは“移動できる方向の数”。

地上戦で相手の後ろに回り込むのに、ティアナならどうする？」

ティアナ「ええと……地形や戦況にもよりますが、周りの障害物を利用したり、射撃で相手の視界を狭めます」

ヴィータ「ま。そーだな。相手の視界から自分を消して、“横に”動いて後ろを取るのが陸戦での背後のとり方だな。空戦だと、そこに“上下”……上昇と下降だな。それが加わる。

空戦の動きのポイントはその行動選択の幅を活かして相手に動きを読ませないこと……言うほど簡単な事じゃねーんだけどな」



サクラ「せあっ!」

シグナム「はあっ!」

ヴィータ達がサクラの動きを見ている間も二人は攻め手を緩めることはなく、むしろその手は激しさを増している。

互いに一步も譲らず、ただ時間だけがその戦いの歩みを刻んでいる。

サクラ「こ……………のっ!!」

巧みにシグナムの剣をかくぐり、その懐に至近距離で紫電槍を撃ち込む。これはさすがに効いたのか、シグナムは大きく後ろに吹き飛んだ。

が、空中で体勢を立て直しレヴァンティンを構えた。

シグナム「飛竜……………」

サクラ「っ!?! 神鳴!!」

神鳴『りょーかい!!』

神鳴はサクラの意志を感じ取り、ハーケンフォームに変形する。

サクラ「煌翼斬!!」

シグナム「一閃っ!!」

炎を纏ったサクラの魔力刃と、炎を纏ったシグナムの連結刃はぶつかり合い、爆発を引き起こした。

シグナム「まさか、私とここまで戦えるようになるとはな……」

サクラ「まだまだだよ。だってシグナム姉さん、本気じゃないでしよう?」

シグナム「!?!」

シグナムは驚きを隠せなかった。

シグナムやなのは達隊長陣には戦力保有の都合によりその能力に制約をかけている。

だが、その事はまだサクラには伝えていなかったのだ。

シグナム「あれだけの動きをする中で見抜くとは……だが、これが今の私の全力である事に偽りはない」

サクラ「うん。それも分かる。

だから、私はもっと強くなるんだ!! 神鳴と一緒にね!」

神鳴『うん!! 僕も朔羅に付いてくって決めたんだ!』

宙に立ち、シグナムに自分たちの思いを言うサクラと神鳴。そんな二人の覚悟を感じ取ったのか、シグナムは静かに微笑んだ。

サクラ「シグナム姉さん、一ついい?」

シグナム「何だ？」

サクラ「多分、このままやっても私の方がギリ貧だと思うから……一撃。お互い全力の一撃ぶつけ合うのってどう？」

サクラはこの戦いに幕を引く提案をシグナムにした。

シグナム「……いいだろう。その勝負、受けて立とう」

直後、二人の間に重い静寂が漂う。

サクラ「カートリッジロード!!」

シグナム「カートリッジロード!!」

二人は同時にデバイスにカートリッジを一発込め、一気に距離を詰

める。

サクラ「紫焰^{しえん}——」

シグナム「紫電——」

「「閃っ!!」」

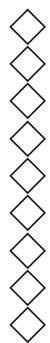
サクラとシグナム、二人の炎は^{いちげき}ぶつかり合い、その爆炎は二人を包みこんだ。

炎がおさまり、熱気の余波が残る中に騎士甲冑が所々損傷した二人が佇んでいた。

シグナム「引き分け、か……?」

サクラ「ううん。私の負け。体、半分くらいしか力入らないもん」

その一言は、この模擬選の幕引きを告げた。



スバル「凄かったです！ 朔羅さん！！」

ティアナ「コラ、声が大きいわよ？ でも、本当に凄かったですよ？」

サクラ「あはは、ありがと♪ 二人とも」

シグナムに肩を借りてどうにか歩いていられる状態のサクラはスバルとティアナに笑顔を見せた。

なのは「シグナム、サクラちゃんを一応医務室まで運んであげて？」

シグナム「わかった」

なのはに促され、二人は医務室に向かった。

<医務室>

シグナム「シャル、居るか？」

医務室の扉を開けると、そこには白衣を着たシャルと青い狼――
――ザフィーラがいた。

サクラ「あ、ザフィーラ♪」

ザフィーラ「御堂、久しいな。詳しい事はシャルから聞いた」

シャル「それで、何かあったの？」

シグナム「先ほどまで、みどうと模擬選をしていたな」

サクラ「発作で力が入らなくなって、なのはが一応シャル姉さんに診て貰って。って」

二人はここに來た経緯を簡単にシャルに話した。

シャル「それじゃあ、そのベッドに仰向けになってくれる？」

シグナムはサクラをベッドに寝かせた後、医務室から出て行った。

そして、シャルは自分のデバイス、クラールヴィントを起動。その光がサクラを包む。

シャル「うーん…… やっぱり情動脱力の発作みたいね。それと、少しの疲労。」

後で、一時的にだけ発作を抑え………」

神鳴『シャル』

机の上に書類を広げながら言うシャルの言葉を神鳴がさえぎる。

シャル「どうしたの？ 神鳴ちゃん」

神鳴『朔羅、寝ちゃってるよ？』

シャル「えっ？」

シャルがベッドの方を見ると――――

サクラ「くゝ……………」

安らかに寝息をたてて眠るサクラの姿があつた。

シャル「あらあら♪ じゃあ、なのはちゃん達にサクラちゃんの事を先に話してくるからザフィーラ、神鳴ちゃん、留守をお願いね？」

神鳴『は〜い』

ザファイラ「了解した」

二人にサクラを任せ、シヤマルは医務室を出ていった。

5話 全力測定!! ～サクラVSシグナム～（後書き）

次回 『サクラのミッド散策とエースのお悩み?』

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7574q/>

魔法少女リリカルなのはStrikerS～雷刃ノ騎士～

2011年8月17日23時22分発行